

アドヴェント

— クリスマスに備えることとは —

Andreas Rusterholz

生活の中で、祭りは必要不可欠です。祭りは普段の生活を中断し、全く違った心持ちにしてくれるからです。もちろん、心うきうきと華やかな気分で一日を過ごしても、日々の生活は大して変わることはありません。それでも私たちは、その特別な時間のおかげで元気になる、再び日常の仕事に取りかかることができるようになります。祭りは生活のリズムを作り、このリズムがなければ、人生は単調な日々の繰り返しにすぎなくなるでしょう。

祭りをを行うためには、準備が肝心です。準備に取り組む人もいれば、何もせず、ただその祭りを心待ちにしている人もいます。心が準備を開始したのですね。

今年は 12 月 1 日の日曜日に、イエス・キリストの生誕を祝うクリスマスに備える待降節（アドヴェント）が始まり、関学の各キャンパスでは、2 日にクリスマスツリー点灯式が行われます。クリスマスに備えることは数人の仕事ではなく、一人一人の使命でもあると、このような準備期間を定めた人々は考えました。かつては断食をし、華やかな結婚式や舞踏会などを控える習慣もありました。今では、慌ただしい毎日が、クリスマス・イブ直前まで続くのが普通になりました。次第に静かな待降節ではなくなり、プレゼントの用意を除いて、クリスマスに備えるという意味は失われつつあります。

祭りとして成立するには — それもすべての祭りに当てはまるかも知れませんが、— 内容と形が固まり、毎年同じように行わなければなりません。そしてそれこそが、人々が毎年と同じ流れの繰り返しに慣れてしまい、それぞれの祭りの本来の意味を見失う原因となってしまいます。

そこでちょっと立ちどまって、ゆっくりとその本来の意味について考え、改めて確認してみましょう。そうすれば、新しい発見も、より深い理解も可能になります。2 千年前の最初のクリスマスに起こったこと、すなわち神が人となり、この世に現れたという出来事を再び読み、それについて考えることで、日々の生活は大して変わらなくても、新しい視野が開けるかも知れません。

(文学部宗教主事)